

# 『経世大典』にみる元朝の対日本外交論

植

松

正

## 目次

はしがき

一 『経世大典』の対日本外交論の構成

二 『経世大典』の対日本外交論の論点

1 日本に派遣された使者たち

2 世祖の対日本外交姿勢

3 第二次遠征失敗の原因と責任

むすび

## はしがき

元朝の日本への遠征についての研究は、とくに日本において多くの成果が蓄積されてきた。この問題に対する包括的な取り組みとしては池内宏氏の『元寇の新研究』<sup>(1)</sup>が重要であることは言を俟たないが、ことが日本社会に与えた影響が甚大であったから、日本史の課題として扱われてきたのは当然ともいえる。しかし日本遠征は東アジアにおけるモンゴルの覇権確立以来の数ある対外遠征の一つに過ぎず、討伐行動を企図し実施した側のモンゴル（大蒙古国）・元朝の視点からする考究は必ずしも十分とは言えないようである。日本遠征が何を目的としたかの一点についても、さまざまな角度からする説明があつてそれぞれ納得できるものが多いが、なお疑問氷解とまでは言えないように思う。その最終的な解答を導くのは容易ではないので、本稿では一つの中国史料の分析的整理を通じて今後の考究の手がかりを提示しておきたい。

元朝の日本遠征に関する記録として、『元史』巻二〇八、日本伝は基本的なものである。しかしそのほかの元代史料は断片的なものが多く、我々は日本史料や『高麗史』の記録なども含めて、それら史料を突き合せて全体像を構築してゆくほかはない。多少なりと総括的、回顧的に述べたある程度の長さの文献史料が望まれるところである。ここに取り上げようとする『経世大典』<sup>(2)</sup>の日本についての記述は、『元史』日本伝と重なるものが多い。筆者はこれまで部分的にこの史料を利用したが、全体的に読み直す価値があるのではないかと考えて、この史料を分析整理して若干の考察を試みようとする。

## 一 『経世大典』の対日本外交論の構成

『経世大典』八九四卷は元朝の典故や制度に関する記録を集成した、会要に類する官撰の政書であった。<sup>③</sup>天曆二年（二三二九）、文宗により『皇朝経世大典』の編纂が命ぜられ、至順二年（一三三一）に稿本が完成、翌年に文宗に進献された。編集の中心となったのは正副総裁の趙世延・虞集であり、馬祖常・蘇天爵・李好文ら多くの学者文人がこの事業に参画していた。皇帝に関わる君事四篇と行政一般の臣事六篇（治典・賦典・礼典・政典・憲典・工典）、計十篇に分ち、膨大な公文書を材料とした一大編纂物であった。原本は散逸してしまつたが、蘇天爵編『元文類』卷四〇～四二「雜著」に上記各篇及び各分目の序録が残っているので、全体の構成を知ることができる。『元文類』はもと『国朝文類』と称せられ、元朝最後の皇帝順帝の元統二年（一三三四）に成立した。いま検討しようとするのは、『元文類』（四部叢刊 本『国朝文類』）卷四一に引用された『経世大典』政典冒頭の征伐の項に「平宋」「高麗」に続く「日本」の部分である。<sup>④</sup>「日本」のあとには「安南」「雲（安）」「南」「建都」<sup>⑤</sup>「緬」「占城」「海外諸蕃」「爪哇」などが続いている。また明代の『永樂大典』に『経世大典』が分散して引用されているために、その遺文を集めた歴史文献——『元高麗紀事』<sup>ジャムナ</sup>『站赤』<sup>ジャムナ</sup>『大元馬政記』『大元海運記』『大元倉庫記』等——が刊行されて元代史の研究に多大の便宜を与えている。

『元史』は明朝成立翌年の洪武二年（一三六九）に成立したが、その外国伝は全面的に『経世大典』に依拠して書かれたのだから、『元史』日本伝が『元文類』に引用される『経世大典』政典、征伐、日本の記録に近いことは当然である。しかし両史料を仔細に比べてみると、ともに叙事を中心にした記事でありながら、細部には微妙な相違も存在する。また『経世大典』には長文ではないが論評的な部分もあり、叙事の記録の取捨、排列、構成からその論評的な意図を推

察できる部分もありそうである。つまりその時点における元朝政府としての日本遠征や対日本外交についての総括的見解が提示されていると考えたのである。

その日本についての記事は『元文類』によれば、通常の本文記述とその後に行の二見すると注のような記述が並存しており、高麗の場合も似たような体裁である。しかし安南・占城・緬になると本文記述の割合はずっと減じて、双行記述が多くを占める。日本の場合には本文記述と双行記述がバランスよく対応しているものの、そのままでは年次を追った事実の羅列に見えて読みにくい。そこで本文記述〔A〕〔H〕と双行記述〔I〕〔20〕を年次と内容に応じて切り分けた上で両者に対応させて再構成した（文末、【史料】『経世大典』政典・征伐・日本序録——『元史』日本伝対照）。細字の双行記述は通常の大きさとして段を下げて示し、なお対応する『元史』日本伝の記事をさらに段を下げて示している。これによって『経世大典』の日本の構成がより明確に判り、『元史』日本伝との微妙な相違も認めやすくなると思う。『経世大典』にはもと史料庫ともいふべき記録の一大集積が存在していた。それを節略して記録したものが双行記述であり、そこからさらに意を以て整理して記したものが本文記述であった。これが序録なるものの成立過程であろう。『元史』日本伝も同じ史料庫からあらためて記録を抜き出したものである。このような切り分け、再構成の結果をその概要とともに示せばつぎのようである。

〔A〕日本遣使——至元三年（一二六六）～九年（一二七二）

- ①第一次遣使、国書の形式
- ②第二次遣使、潘阜の日本派遣
- ③第三次遣使、塔二郎・弥二郎の拉致
- ④第四次遣使、大蒙古国中書省の書

〔5〕第五次遣使、趙良弼の活動

〔6〕高麗の通事曹介(叔)〔升〕<sup>〔6〕</sup>の提言

〔7〕高麗国王国書、弥四郎の入朝

〔B〕第一次遠征とその後——至元十年(一二七三)～十四年(一二七七)

〔8〕忻都・洪茶丘<sup>ヒンドウ</sup>の日本遠征

〔9〕遠征軍の侵攻と撤退

〔10〕第六次遣使、国書の形式

〔11〕日本商人の金・銅銭交易

〔C〕第二次遠征とその挫折——至元十七年(一二八〇)・十八年(一二八二)

〔12〕阿剌罕<sup>アラガン</sup>・范文虎・忻都<sup>ヒンドウ</sup>・洪茶丘の日本遠征

〔13〕遠征軍進発に際して世祖の懸念

〔14〕將軍による遠征軍壊滅の報告

〔15〕敗卒于闐の日本脱出報告

〔D〕第三次遠征計画と方針転換——至元二十年(一二八三)～二十三年(一二八六)

〔16〕日本行省の再編、昂吉兒<sup>アンギル</sup>の遠征中止提言

〔17〕第九次遣使、王積翁の日本派遣とその死

〔18〕世祖の日本遠征中止の決断

〔E〕世祖の対日本外交姿勢

〔F〕第二次遠征失敗の原因と責任

〔G〕成宗の対日本外交——大徳二年（一二九八）・三年（一二九九）

〔19〕也速答児<sup>エスデル</sup>の日本遠征提言と成宗の応答

〔20〕第十次遣使、寧一山の日本派遣

〔H〕結語

史料によつて事実経過を要約して記述するだけではない。とくに〔E〕と〔F〕は世祖期における対日本外交と日本遠征を回顧総括した評価的記述であることに注意したい。〔G〕の成宗期の記事を加えて、対日本外交論は〔H〕の総括的結語を以て収束する。

## 二 『経世大典』の対日本外交論の論点

### 1 日本に派遣された使者たち

本文冒頭の書き出し部分〔A〕は元朝（第五次遣使までは大蒙古国）の日本への公式な使者の名録であり、黒迪（黒的）・殷弘・趙良弼・杜世忠・何文著・王積翁・釋如智・寧一山が挙げられる。彼らは日本国王宛の国書を携行した、あるいは携行しようとしたものである。第一次遠征後に派遣され日本の鎌倉で斬刑に処せられた第六次遣使の杜世忠・何文著もここに列せられている。また第二次遠征後に派遣された第八次・第九次遣使の王積翁と如智は日本に到達せずとも公式の使者として名が挙げられている。<sup>〔7〕</sup>成宗期の第十次遣使の寧一山（一山一寧）の名があるのも当然である。

第二次遣使に際して、高麗人潘阜・李挺が大蒙古国の使者として日本に初めて国書をもたらした。また第四次遣使に

も高麗人金有成・高柔が大蒙古国中書省からの国書をもたらしした。高麗の潘阜と金有成が使者として重要な貢献を果たしたと評価されているのも首肯できる。

しかし元朝からの遣使と理解されている、至元十六年（一二七九）に范文虎から派遣された周福・欒忠の名がここに見えない。元朝としては国使として数えていなかった可能性がある。「元朝対日本国書・書簡表／高麗対日本国書・書簡表」（補訂）を掲げておくが、これを元朝からの使者派遣としたのは、范文虎が「詔を齎し」と言っていることを重く見て「第七次遣使」と数えたのである。すなわち『元史』卷一〇、世祖紀至元十六年八月戊子（十三日）条にいう。

范文虎言、「臣奉詔征討日本、比遣周福・欒忠与日本僧齎詔往諭其国、期以来年四月還報、待其從否、始宜進兵。」又請簡閱旧戦船以充用。皆從之。

范文虎が言った。「臣は詔を奉じて日本を征討しようとしていますが、さきに周福・欒忠を遣わし日本の僧とともに詔を齎して往きその国に諭しているところであり、来年四月には使者が帰還報告するので、日本が従うか否かの返報を待つて、始めて兵を進めるのがよいでしょう」。さらに旧い戦船を選び点検したうえで遠征の船団に充当するのを請うた。どちらの件も裁可した。

日本の「鎌倉年代記裏書」には、弘安二年（一二七九）六月二十五日のこととして、大元の將軍夏貴・范文虎が周福・欒忠を遣わして渡宋僧の靈杲や通事の陳光らと着岸して牒状をもたらし、博多で斬首されたとある。また『勘仲記』によれば、同年七月に牒状は鎌倉、朝廷で検討され、もたらされた文書は日本では「宋朝牒状」と称され、亡宋の旧臣が日本の帝王に直に書簡を送るのは分を過ぎたものと議論された。そうした議論を経て周福・欒忠は博多（大宰府守護所）において斬首されたとみられる。牒状の内容は伝わらないが、日本史料の表現から推して、夏貴・范文虎が旧南宋の將軍であり、彼らが大元皇帝の詔を受けて現に日本攻略の態勢にあること、日本側の従順な応答を得れば悲劇的結末を回

第 6 次遣使		第 7 次遣使		第 8 次遣使	第 9 次遣使			第10次遣使
第 1 次遠征 至元 11 (1274)	至元12(1275)	至元16 (1279)		至元20(1283)	至元21 (1284)	至元29(1292)		大徳 3 (1299)
	杜世忠・何文著・ 撒都魯丁・徐賛	周福・欒忠		如智・王君治	王積翁・如智	〔商舶〕		一山一寧・ 西潤子曇
	刑死於鎌倉	刑死於博多		不到達	至対馬近海	?		至鎌倉
	※詔	范文虎書 (宋朝牒狀)		※詔	※詔	燕公楠書 (燕公楠牒狀)		※詔
				至元 18 (1281)		?		金沢文庫文書 金沢蠡余残編
				善隣国宝記				鎌倉遺文
								元史成宗紀

第 1 次遠征 至元 11 (1274)					至元29(1292)	
					金有成・郭麟	
					明年至鎌倉	
					高麗国王	
					金沢文庫文書 金沢蠡余残編	
					鎌倉遺文	
					高麗史	

原載「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」(『東方学報』第90冊、2015) を補訂



元朝対日本国書・書簡表（補訂）

第1次遣使	第2次遣使	第3次遣使	第4次遣使	第5次遣使	
至元3 (1266)	至元4 (1267)	至元5 (1268)	至元6 (1269)	至元7 (1270)	至元8 (1271)
黑的・殷弘・ 宋君斐・金贊	潘阜・李挺	黑的・殷弘・申思 佺・陳子厚・潘阜	金有成・高柔	趙良弼・ 徐僞・張鐸	趙良弼
不到達	至大宰府	至対馬	至大宰府	至大宰府	在大宰府
大蒙古国皇帝	同左	？	大蒙古国中書省	※詔	趙良弼書
	東大寺文書 異国出契	？	異国出契		東福寺文書 鄰交徵書
	鎌倉遺文				鎌倉遺文
元史世祖紀・ 日本伝				元史日本伝	

高麗対日本国書・書簡表（補訂）

	至元4 (1267)	至元5 (1268)	至元6 (1269)		至元9 (1272)	至元9 (1272)
	潘阜・李挺	潘阜・李挺	金有成・高柔		？	張鐸
	至大宰府	至大宰府	至大宰府		至大宰府	至大宰府
	高麗国王	潘阜・李挺書	慶尚道按察使		高麗国王	(高麗牒狀)
	東大寺文書 異国出契	東大寺文書 異国出契	異国出契			
	鎌倉遺文	鎌倉遺文				
	高麗史					

避しうるなどのことが書かれていたであろう。とすれば、世祖の名において日本国王に詔諭する「国書」とは異なった体裁の文書であった可能性がある。

元朝の地方官が日本に発した書簡の例としては、至元二十九年（一二九二）の江浙行省参知政事燕公楠の例があるが、日本商船の遭難後の措置であるのが明白であるので、これは地方官の責任によって発せられた書簡と理解し、使者の派遣もないので、元朝からの公式の遣使には数えていない<sup>(10)</sup>。

## 2 世祖の対日本外交姿勢

全体として論評的な記述となっている<sup>[E]</sup>の文は四つの部分から成っており、つぎのようである。

国書には始めに「大蒙古皇帝、書を日本国王に奉ず」と書き、ついで「大元皇帝、書を日本国王に致す」と称し、文末にはいずれも「不宣白」と云ったが、これは臣下とせず、対等との意である。その言辭は懇切かつ誠実であり、抑制の効いた気持ちで書面に溢れており、かの前漢の文帝が南越の尉佗<sup>いた</sup>に対した場合でもこれほどではなかった。

（第二次遣使の際に）潘阜が成果なく帰還したときには、天子は命令を取り次ぐものが伝達しなかったと考え、（第三次遣使の際に）黒迪（黒的）が劫かされたときにも、天子は国境警備に当たるものが職務上固く防禦しただけで、これは下級の役人の過まちと考えられた。趙良弼が赴いたときに、またも日本から返報されなかったことにしても、高麗の（三別抄の）林衍が叛してルートが塞がっているとの理由であったかもしれないが、それでも最終的には、日本が拒否して従わなかったということにはしなかった。（第一次遠征のとき）忻都の遠征軍が帰還してから、その国が商人に金を所持してやって来て銅銭と交易させようとしたときも、やはりこれを許可し、さらに詔を降し商人を困苦させてはならないとした。遠いものを寛やかに懷ける方法は行き届いたものだった。

四つの論点を要約すればつぎのようである。第一は、国書の形式上の問題であり、皇帝が日本に対して不適切な扱いをしたことは一切なかった。第二は、第二次・第三次遣使に關して、使者に対する日本の処遇について世祖は日本の役人の不手際であろうと受け止めた。第三は、趙良弼の遣使に關して、日本は公式な使者の派遣を以て応答しようとしなかったが、それでも元朝側としては日本が断固拒絶して不服従だと結論づけたわけではなかった。第四は、第一次遠征後の至元十四年（一二七七）に、日本が商人を送つてきて金・銅錢交易を図ろうとしたが、元朝は寛容にもこれを許可した。これらの論点につき関連する事実を補足解説し、事態を元朝側においていかに受け止めて理解していたかについてみてゆこう。

第一は前稿でも論じたところであるが、要するに①の最初の日本遣使で国書冒頭に「奉書」とし、⑩の第六次遣使以後には「致書」としたが、国書末尾に「不宣」（不宣白の意）で締めくくると併せて、決して相手を低く見る表現ではなく、対等の関係における鄭重な扱いだという。

「奉書」は『周礼』夏官の用例が最も古く、つぎのようである。

虎賁氏、掌先後王而趨、以卒伍、軍旅会同亦如之。……若道路不通、有徵事、則奉書以使於四方。

虎賁氏は王に先後して趨り、卒伍を以てするを掌り、軍旅会同するも亦たかくの如くす。……若し道路通ぜず、徵事あらば、則ち書を奉じて以て四方に使す。

虎賁氏は周王の周囲を守る護衛の統率者であり、戦乱や災害で道路が通じないときに、王に代つて書を奉じて遠方の諸侯に使者に立った。これがのちには「致書」と同じく単に書簡を送達する意味にもなったようである。『元史』に「奉書」の用例を求めるとつぎのようである。

・（至元十一年六月）庚申、問罪於宋、詔諭行中書省及蒙古・漢軍万户・千戸軍士曰、「爰自太祖皇帝以来、与宋使介

交通。……朕即位之後、追憶是言、命郝經等奉書往聘、蓋為生靈計也、而乃執之、以致師出連年、死傷相藉、係累相屬、皆彼宋自禍其民也。……」(『元史』卷八、世祖紀)

・(至元十二年五月庚辰)、宋嘉定按撫咎万寿遣部將李立奉書請降、言累負罪愆、乞加赦免。詔遣使招諭之。(『元史』卷八、世祖紀)

・(至元十二年十二月庚子)、宋主復遣尚書夏士林・右史陸秀夫奉書、称姪乞和。(同前)

・知南康郡葉闇來降、殿前都指揮使・知安慶府范文虎亦奉書納款、阿朮遂率舟師造安慶、文虎出降。(『元史』卷一二七、伯顔伝)

・(陳)日烜乃棄城遁去、仍令阮劬銳奉書謝罪、并献万物、且請班師。(『元史』卷二〇九、安南伝)

最初の事例は世祖が南宋への総攻撃に先立って、諸將軍士に対して戦役の名分を明らかにした詔文である。かつて郝經に命じて書を奉じて使者に立たせたという。これは南宋に対して鄭重に扱ったとの意を含むのであろう。ほかは南宋や安南の事例であるが、力関係における弱者が強者に対するときに用いられている。君主間の書簡往復の例としては、つぎのような五代十国のものがある。

・(顯德三年二月)甲戌、江南国主李景遣泗州牙将王知朗齎書一函至滁州、本州以聞、書称「唐皇帝奉書於大周皇帝」、其略云、「願陳兄事、永奉鄰歡、……」云。書奏不答。(『旧五代史』卷一一六、周書、世宗紀)

・(明德四年)三月、晋遣使告即位、且叙姻好。其書曰、「大晋皇帝奉書大蜀皇帝、伏自中原多故、大慙繼興、朱氏不道、而皇天不親、沙陀背義、而蒼天失望。……」帝復書用敵国礼。(『十国春秋』卷四九、後蜀、後主本紀)

この二例はほぼ対等の関係における文書のようなものである。なお後者に返書する時に敵国の礼を用いたとあるが、「敵国」とは国力が匹敵する、つまり対等の関係との意味である。またこれを「不臣之礼」ともいう。<sup>(12)</sup>

要するに、元朝としては日本国王宛の国書において、決して威圧的でなく穏健で恩恵的な姿勢に終始したとの主張である。これが『経世大典』の趣旨である。しかし途中で「奉書」から「致書」に変更したのだから、「奉書」には何らか謙遜のニュアンスを伴い鄭重に過ぎると意識しての変更だったのではなからうか。杜世忠・何文著らの第六次遣使に際して初めて「致書」が用いられたが、すでに第一次遠征を蒙っている日本側にしてみれば、受け取った国書の文言の一字に鋭敏にならざるを得ず、「奉書」から「致書」への変更が意図あるものと受け止められた可能性はある。「奉書」の奉はもとより「たてまつる」という和語とは語感を異にするであろう。とはいえ、これが建治元年（至元十二、一二七五）九月二日の杜世忠・何文著をはじめ随員の中央アジア人や通訳の高麗人、一行五名が鎌倉で処刑されるという深刻な結末に導いたとするならば、小さくない問題である。使者処刑の理由としてはもたらされた国書の内容が重要であるにちがいないが、その内容は今に伝わらない。

【杜世忠ら使者処刑情報の伝わり方】 元朝に杜世忠らの刑死の情報が伝わると、忻都・洪茶丘は憤慨して日本征討を主張したが、宮廷の御前会議では即応しての東征には至らなかった。至元十七年（一二八〇）二月のことであり、その間、実に四年余りを経過していた。その情報伝達のプロセスを伝えるのは、『高麗史』卷二九、忠烈王世家のつぎの記事である。

（忠烈王五年八月）、梢工上左・引海一冲等四人、自日本逃還言、「至元十二年、帝遣使日本、我令舌人郎将徐賛及梢水三十人、送至其国、使者及賛等皆見殺。」王遣郎将池瑄押上左等、如元以奏。

（忠烈王五年（至元十六、一二七九）八月）、梢工の上左・引海の一冲ら四人が日本から逃げ還って言った。「至元十二年に元朝皇帝が日本に遣使することになり、我らは舌人郎将の徐賛及び梢水三十人をその国に送り届けましたが、使者及び賛らは皆殺されました」。王は郎将の池瑄を遣わし上左らを押送し、元に赴いて奏上させた。

使者一行五名が鎌倉に赴くと、船乗り達は彼らが戻るのを大宰府で待っていたであろうが、処刑の情報は秘密にされて、その消息は直ちには伝わらなかったと考えられる。上左ら四名が日本から脱出して高麗にもどると、忠烈王は池瑄に命じて上左らを証人として伴い行き、第六次遣使の悲劇を元朝に報告させた。元廷への到着は恐らく至元十六年後半のことであろう。

ところで中国史上、使者の殺害は頻繁ではないが事例はあった。いま元代についてみればつぎのような四川の少数民族の例がある。『元史』卷一〇、世祖紀にいう。

（至元十五年十二月）戊申、以叙州等処秃老蜜殺使臣撒里蜜、命發兵討之。

もしも杜世忠ら使者殺害の情報が時日を弄せず伝わっていたならば、第二次遠征にさらに明白な名分を与えたと思われる。しかしながら『経世大典』ではなぜかこの一件を格別に言挙げして強調していない。

また当時の元朝と日本の関係を前漢の文帝が南越の尉佗に対した恩惠的態度に擬しているところはもとより修辭的な文で、日本側が読むことを前提としないものである。しかし仮に日本側がこの文を目にしたとすればその真意を測りかねたであろう。南越国は秦末漢初に両広地方に存在した独立政権である。もと秦の始皇帝が南方に遠征軍を派遣したが、巡幸途上に亡くなり国内が戦乱状態に陥ると、遠征軍は北帰もま、ならず番禺（広州）を中心に現地越族の協力を得て自立した。真定の人趙佗は南海郡尉の任（こゝろ）から後事を託されたので尉佗と称され、領域を維持した。漢の高祖（劉邦）から陸賈が遣わされると、尉佗は漢の支配を受け入れて南越王に封ぜられ、臣と称して朝貢した。しかし高祖が没して漢の政府が混乱すると、尉佗は帝号を称し独立傾向を強める。やがて文帝が即位すると再び陸賈が遣わされ、帝号を僭称し使者を通じないのを責めたので、尉佗は恭順の態度で謝し、帝号をやめて朝貢するようになった。しかしそれは表向きなこと、国内では帝号を去らなかつたという。これが南越の武帝である。やがて漢の武帝の南方遠征にあつ

て南越国は滅亡した。

ところで日本への遣使について千年以上も前の南越の事例に擬するのは、『経世大典』に限らないようである。至元二十九年の日本国王宛の高麗国国書に見える「抗衡為禍」の句が陸賈遣使の故事に由来するとは、筆者が前稿で推測したところである。<sup>(15)</sup> また胡祇遹<sup>しう</sup>『紫山大全集』巻六、「宣撫輔之の日本に奉使するを送る」の詩の一節にいう。

海外尉佗雖倔強 漢庭陸賈更忠貞 片言要領來威表 一使勝於十萬兵

海外の尉佗は倔強なりと雖も 漢庭の陸賈は更に忠貞 片言の要領もて来威の表あり 一使は十萬の兵に勝る

陝西宣撫使であつた趙良弼（字は輔之）の日本への遣使を陸賈の南越への遣使に擬している。南越対漢帝国、日本対元帝国の關係をこの文学的表現から深読みするのは難しい。ここでは時代を隔てた二国關係が、ともに微妙なバランスの上に立つて推移したことを着目するに止めておくが、興味ある対比である。さらに「海外」とは四海の外の意と思われるが、これを元代の現実に引き付けて考えれば、第四次遣使に際して中書省から発せられた大蒙古国国書のなかにつぎのようにいう。<sup>(16)</sup>

我国家以神武定天下、威德所及、無思不（能）「服」。逮皇帝即位、以四海為家、兼愛生靈、同仁一視、南抵六詔・

（五）「安」南、北至于海、西極崑崙、數万里之外、有国有土、莫不畏威懷德、奉幣來朝。

ここに世祖の威徳の及んだ範圍として、南は六詔（雲南地方）・安南、北は海（北海、バイカル湖か）、西は崑崙としてゐる。ここに東について言及がないのは当然、日本が念頭にあつてのことであり、日本はその勢力圏に入ることが期待されてゐたわけである。その覇權構想は国書の起草者の発想ゆえか、伝統的な天下觀を反映したものに見える。

論点の第二は、初期の大蒙古国の使者に対する日本側の処遇についてであるが、ここには②（第二次遣使）と③（第三次遣使）の文が踏まえられている。以下少しく史実を確認しつつ述べる。第一次遣使では、黒的と殷弘一行は巨済

島の南端松辺浦に至り対馬を遠望しながら、風濤を前に引き返した。翌至元四年（一二六七）正月、高麗国王は宋君<sup>く</sup>斐・金贊を黒的・殷弘とともにモンゴルに派遣し、二月、事の次第を世祖に報告した。六月になって高麗国王への詔が下されたが、その内容は高麗国王を叱責して、日本国との通好実現に責任をもたせたものであった。<sup>(17)</sup> 詔を受けた高麗国王は、八月に潘阜に蒙古の国書と高麗の国書を携えて日本に派遣することを決定した。②の第二次遣使を前にした高麗国王の言葉によれば、道（海道）の危険で遠いことを理由に「天使を辱<sup>はづ</sup>しむべからず」と、黒的が日本へ同行するには及ばないとした。かくて九月二十三日、潘阜は日本に向けて発船した。<sup>(18)</sup> 元宗九年（至元五、文永五、一二六八）正月一日、潘阜一行は大宰府に到着して国書を手渡し、そのまま大宰府に逗留した。日本の朝廷と幕府は大きな衝撃を以て蒙古と高麗の「牒状」を受け止め、いかに対処するか会議を重ねた。高麗の「牒状」に「至元」の年号が使用されていることにも危惧を深めた。日本から返答を得ようと待機していた潘阜は、「返牒」が得られないのを見きわめたとみえて、七月丁卯（十八日）に高麗に帰還したので、高麗国王はさっそく潘阜を蒙古へ派遣して経過を報告させた。<sup>(19)</sup> つまり最初に国書を届けた潘阜が大宰府で六箇月待たされた末に成果なく帰国したのは、日本の役人が国書を上聞できなかつたからで、日本国王の責任ではないと理解したようである。

③の第三次遣使では、至元五年九月、黒的・殷弘を国信使と副使に任じ、高麗国王を譴責する詔を携行させ、確実に日本遣使を実現するよう迫り、高麗の重臣を日本に派遣するよう命じた。<sup>(20)</sup> 『高麗史』によれば、十一月、黒的らは高麗王廷に至って詔を伝え、十二月庚辰（四日）、高麗は申子<sup>し</sup>（全）<sup>(21)</sup>「詮」（知門下省事）・陳子厚（礼部侍郎）・潘阜に命じ黒的・殷弘とともに日本に向けて出発させた。使者の船団四艘が対馬北端の豊崎に現れたのは翌年文永六年（至元六、一二六九）二月十六日であった。<sup>(21)</sup> 『五代帝王物語』には「去年の返牒なきに因て左右をきかん為也」とあるから、遣使の趣旨は日本側に伝わったはずである。そこに武力衝突が起きて、使者は倭人塔二郎・弥二郎を拉致して引きあげた。



⑤に「黒迪（黒的）被劫」と、③に「交關」とあり、第四次遣使の大都古国中書省からの国書にも「彼の疆場きやうえきの吏、敵舟の中に赴き、俄かに我が信使を害す」とあるように、武力衝突が起こったのは明らかである。③の「交關」に続けて「其の塔二郎・弥二郎二人を執えて還る」とあるので、筆者は文脈から判断して塔二郎・弥二郎は単なる島民ではなく、ある程度の身分を有する、対馬の地方官庁の下級職員とするのが自然だと考えた。<sup>(22)</sup>モンゴル国の使者は捕えた日本人二名を日本遣使実行の確たる証拠として皇帝に示したかったのであろう。一行は三月辛酉（十六日）に高麗王廷にもどると、翌月戊寅（三日）に申子佺に命じて経緯の報告のため黒的とともに倭人二名を伴ってモンゴルに出発した。つまり使者に対する日本の処遇についても、世祖は現場の役人に罪はないと寛大に好意的に受け止めたという。なお大都古国中書省からの国書中に、⑤の「以為将命者不達」、「典封疆者、以慎守固禦為常」、「此将吏之過」の文が見えている。<sup>(23)</sup>『経世大典』には本来この国書全文が収録されていたはずである。

論点の第三は、趙良弼(24)の遣使に関する記述である。対応するはずの⑤には、まず彼が元廷を出発する前に日本国王とどのような儀礼（上下の分）によって会見するかの検討が行われたことが見えるが、遣使の経緯は一切省略されて、「良弼至り、其の太宰府守護所に留めらる者これを久しくす」とだけある。この表現は④の金有成について言っている『元史』日本伝そのままであり、本来趙良弼に関わる文ではないはずである。しかも⑤の該当部分はや、読みにくい文である。そこでなぜこのような文章構成になったか考えてみよう。

趙良弼は至元七年（一二七〇）十二月に陝西宣撫使から秘書監となつて日本遣使の命を受け、至元八年（一二七一）正月、高麗に至つた。三別抄軍の叛乱のさなか、趙良弼一行は文永八年（至元八）八月に筑前今津に到着し、「東福寺文書」（鎌倉遺文）古文書編一四、一〇八八四）にみえるように、九月十五日に太宰府に到着した。その中に弥四郎ら同道の日本人がいた。趙良弼がもたらした国書は『元史』日本伝に載せられているが、その正本は日本国を代表する人物

に面会したうえで手渡すと主張したから、彼は大宰府守護所で返答を待ち続けるよりなかった。同年十二月には趙良弼は書状官張鐸を先に高麗に行かせた。日本の使者を高麗經由で元朝に送る準備のためであらう。至元九年（一二七二）正月十三日、趙良弼は日本の使者十二人と韓半島南端の合浦県に至り、丁丑（十八日）に高麗王廷に至った。<sup>(25)</sup>ここで張鐸をして日本人十二人とともに元朝に向かわせた。<sup>(26)</sup>二月一日、張鐸と日本人は都に至り、正規の日本国の使者なら携行すべき国書もないままに世祖に謁見を求めた。しかし世祖は、日本国主の使者がやって来て大宰府守護所（の使い）と云うのは詐り（ごまかし）であらうと疑い、世祖との謁見は回避されて弥四郎を含む日本の使者は帰国させられた。<sup>(27)</sup>日本からの使者派遣が趙良弼の構想に出たとしても、果して使者派遣に大宰府守護所が関わっていたならば、守護所の意図や思惑を考えてみる価値はありそうである。守護所はさきに塔二郎・弥二郎が世祖から受けた接遇を前例として想定し期待するものの、日本国を代表して元朝に直接対峙するような形だけは必ず避けなければならなかったのであらう。

四月庚寅（三日）、張鐸と日本の使者は高麗に還り、同月甲寅（七日）、高麗は康之邵（御史）に日本の使者を送還させた。五月に張鐸は日本に至った。この年二月十三日に高麗国王が日本国王宛に国書（二度目の国書）を送り元朝と通好するよう説き、五月にも同じ趣旨の書簡が発せられたという。<sup>(28)</sup>

高麗に留まっていた趙良弼は、至元九年の末に日本招諭のため再び日本に向かった。<sup>(30)</sup>やはり大宰府守護所に至ったものの、日本の国都に入ることはかなわず、翌至元十年（一二七三）三月癸酉（二十日）、高麗に還り、同月乙亥（二十二日）には高麗国王から慰勞され白銀と苧布（ちよふ）を贈られた。この際、元朝の高麗達魯花赤（タルガチ）の李益からも贈物があつたが、趙良弼は「此れは汝が高麗を侵略して得たものだ」と受け取りを拒否した。<sup>(31)</sup>趙良弼が元廷に帰還したのは六月二十七日であつた。<sup>(32)</sup>彼が対日交渉のために元朝を離れていた期間は二年半に及んだ。大宰府守護所と難しい折衝を続け、一旦は高麗に引きあげて張鐸と弥四郎ら日本の使者が元廷と往復するのを見きわめたり、高麗国王を通じて日本への働きかけも

行つた。日本滞在中には禪僧円爾えんにん（聖一国師）や南浦紹明なんぽしょうめい（大応国師）が通訳に従事して双方の意思疎通に努め、交流を深めた。さらに南宋寄りの日本の渡宋僧瓊林けいりんと対決問答したことも知られている。<sup>(35)</sup> 日本に渡る前のことだが、元朝の金州方面での屯田には対日本政策の上から反対し、帰国後、日本遠征が議に上ったときには、世祖の下問に応えて日本を攻撃するには及ばずと進言した。<sup>(36)</sup>

このように見てくれば、趙良弼こそ元朝の使者として日本と交渉らしい交渉を行おうとした人物であることは明らかであり、世祖も彼の功績を大いに認めていた。<sup>(35)</sup> 彼はべつに日本の大宰府守護所に拘束されていたのではなかった。彼の官位の高さと、推測される一行の盛儀に加えて、なにより携えた国書が従前よりも日本の元朝への遣使を誘導推進すべく一歩踏み込んだ内容であったから、日本（鎌倉幕府）は軽くあしらうわけにはゆかなかった。そうでなければ前述のような行動の自在さは見られなかったはずである。Eの「高麗林衍叛」と「道梗」の句は、Fに付した『元史』日本伝にみえる国書中の「高麗權臣林衍構乱」と「中路梗塞」の句に対応することがわかる。国書の後半部分を翻訳してみよう。

……ひき続き（こちらは日本に）通問しようとしたが、たまたま高麗の權臣の林衍が乱を構え、そのために果たせなかった。王もまたそのせいで取りやめて遣使しなかったのか、あるいは遣わしたが中途で先に進めなくなったのか、どうともわからない。そうでなければ（本当に遣使の行動を起こすつもりがなかったとすれば）、日本はもとより礼を知る国を標榜している以上、王の君臣がどうして漫然とそのような思慮のないことをするだろうか。近ごろすでに林衍を滅ばし、王位を復旧し、その民を落着かせたので、特に少中大夫・秘書監の趙良弼に命じて国信使に充て、国書を持参して往かせることとした。もしただちに使者を發してこれと一緒にやって来させるならば、仁者に親しみ隣国に善くするのが国の美事というものである。<sup>(37)</sup> もしもぐずぐずと引き延ばし、かくて兵を用いるような

ことにでもなれば、いったい誰がそんなことを願おうか。王はよくお考えあらんことを。

〔E〕の文章は彼の長期にわたる粘り強い努力の跡を伝えるものであろう。<sup>(38)</sup>『経世大典』に彼の対日本工作活動を要約して記録するにはあまりに複雑で多端であったが故に、その大宰府守護所での長く困難な交渉の印象から、「留其大宰府守護所者久之」と、④の金有成についての表現を借りたものと理解しておきたい。趙良弼の遣使に対し、結局日本は公式な使者の派遣を以て応答しなかった。それでも元朝側は日本が断固拒絶して不服従（旅拒）だと決めつけなかったとの『経世大典』の評価である。

両次のモンゴル襲来を経験したあとの日本では、それ以前の両国間の折衝の努力（とくに趙良弼の活動）は意味のないものとされた。かくて少数の日本人による大蒙古国・元朝の都（中都・大都、今日の北京）への訪問の記録は軽んじられて失われ、やがて人々の記憶からも消え失せてしまったのだろう。

論点の第四は、Ⅱに付す『元史』日本伝に対応している。そこに「日本」と主語が示されているから、日本国が商人を派遣して金を持ち込んでこれを銅銭と交易しようとしたところ、元朝は寛容にもこれを許可したとの意味であろう。

しかも〔E〕に見えるように「詔を發して（日本の）商人を苦しめてはならぬ」とした。しかしこの詔（皇帝聖旨）の發布を直接に跡付ける関連史料は見出せない。もしも日本国宛ならば、商人を使つて利を求めるのではなく入朝して友誼を通ぜよと論じたことが考えられるが、ここは日本に向けて発した詔ではあるまい。元朝の地方官庁に対するものであり、第一次遠征後の不穏な両国関係にこだわらず日本商人の交易の希望をかなえて許可した詔と捉えるのが適当と考える。

この記事の至元十四年（一二七七）といえば、前年正月に南宋軍はほぼ壊滅して趨勢は決し、三月には元軍の総司令官バヤン伯顔が都の臨安に入城したように、南宋が滅亡して間もない時期である。そんな折に日本が国家の活動として商人を貿易のために派遣したなどとは到底考えられない。それを元朝としては民間の商人の自由な活動とは捉えずに、日本に対

して恩恵を与えたとの姿勢で有利な取引きに応じたものであろう。<sup>(補注)</sup>

ここで想い起されるのは日本の海商の飽くなき銅銭への希求であり、同時に元朝は征服した旧南宋領から金銀を收取するに努めていたことである。江南において銅銭の行用を禁止し鈔法を行き渡らせるのもその方針の一環であった。<sup>39)</sup>後世姦臣と非難される宰相阿合馬<sup>アフマド</sup>の専権の時期であったことにとくに注意する必要がある。阿合馬の奸党と目された耿仁<sup>コウ</sup>が宰相に準ずる参議中書省事から参知政事として宰相の末席に名を列ねたのはこの至元十四年の末であり、やがて彼は左丞に昇進した。『元史』巻九四、食貨志、歳課、市舶につきのようについて。

〔至元〕十九年、又用耿左丞言、以鈔易銅銭、令市舶司以銭易海外金珠貨物、仍聽舶戸通販抽分。

〔至元〕十九年（一二八二）、また耿左丞の言を採用して、鈔を銅銭に易えて、市舶司に銅銭を海外の金珠などの貨物に交易させ、なお船舶の所有者にその販売と現物の一部を税として徴収するのを許可した。

耿仁の提言によって、国内で行用を禁止されていた銅銭を海外貿易に活用し、金や真珠などの物資に交易させる政策がとられた。ここにみた至元十四年の記事はその端緒をひらいたものとして注目される。「柔遠之道至矣」の一句は論点の第四の結びであると同時に、〔E〕全体の結びでもあり、遠い異域を和らげ懐ける世祖の外交方針を評した言でもあろう。

### 3 第二次遠征失敗の原因と責任

論評的な記述となっている〔E〕の文も四つの部分から成っており、つぎのようである。

〔第二次遠征で〕阿刺罕<sup>アラガン</sup>が日本に出征するとき、天子が諸將に宣諭してこう言った。「一つだけ朕が心配するのは、諸君同士が協調しないのではということだ」。果して、諸將は戸を興<sup>かほ</sup>つて帰るような大敗を喫した。<sup>40)</sup>それで彼らはこのように上言した。「將校たちが統制に従わず勝手に逃亡したので、兵士を船に載せて合浦に至り、郷里に還ら

せました」。敗卒の于<sup>う</sup>間なる者が逃れ帰るとこう言った。「省臣たちが先に逃げ去り、軍を五龍山の下に遺棄し、日本に殲滅されました」と。諸將の罪がここで始めて露見した。

昂吉児<sup>アンギル</sup>の言うには、「語に『上下の欲を同じくする者は勝つ』<sup>(41)</sup> また『兵は氣を以て主と為す』<sup>(42)</sup> といいます。近年、民は貧しく賦は重く、しきりに水旱が起こつても瀕死のものを救うもままならず、そこに驅りたてて海外遠征を行行するのでは悲しみ嘆かないものはなく、これでは『上下の欲を同じくする』とはいえません。大軍は東海で挫かれ敗れ、乱れ慌てて意氣阻喪し、人々は闘う意欲をなくし、いわゆる氣を以て主と為すどころではありません」。

第一は日本への進發に際して世祖の懸念する言葉、第二は帰還した將軍の報告、第三は遅れて帰還した敗卒于間の報告、第四は昂吉児の日本遠征についての意見である。第二次日本遠征は確かに失敗したが、兩軍大会戦した末の敗北とは言いにくい。知られるように成功と失敗を分けたのは暴風の害によるところが大きいからである。昂吉児はこれを「挫<sup>ぶ</sup>衄<sup>く</sup>」と表現している。<sup>(43)</sup> それでも『経世大典』では失敗の原因を自然的条件に帰せず、もっぱら人の行動を論点として取り上げる。

論点の第一は⑬の文を踏まえているが、まず④の年次についてふれておく。④は日本遠征を実施し失敗した事実を述べているから「至元十八年」と訂正するのが適當である。しかしなぜ原文に「十七年」とあるかといえば、⑫の日本行省（征日本行省）の設置と人事が十七年だったためであろう。さて⑬は至元十八年（一二八二）二月丙戌（十九日）の遠征軍出發に先立って、諸將を前にしての世祖の言葉（勅）である。⑬に対応する『元史』日本伝によれば、まず日本遠征の名分が表明され、<sup>(45)</sup> ついでよその国家を取り他人の土地を手に入れても、人々をすっかり殺してしまつては土地を手に入れてもどうしようもないと、かねて聞いた漢人の言葉を引用する。ここには遠征先での無用の殺戮を戒める意図が隠されているとみるべきであろう。最後に世祖が憂慮してやまない懸念が述べられている。⑬に引用されるのはその最

後の部分であり、遠征の將軍たちの間の不和の問題である。ただ「范文虎新降者也、汝等必輕之」の部分は『元史』日本伝に見えず、『経世大典』だけに見えるストレートな表現である。世祖に早くから仕えた忻都・洪茶丘らの將軍たちが新附の將軍たちを低く見ることはありがちであろう。そうであっても海洋を渡って日本に遠征するには旧南宋勢力に頼らざるを得なかったのである。しかも<sup>13</sup>に対応する『元史』日本伝の末に見るように、世祖は遠征軍が日本と交渉する場面を想定し、「仮に彼の国の人がやって来て卿らと話し合うことがあったときには、きつと心を同じくして協力して話し合い、あたかも一人の口から出るように応答せよ」と、諸將間の不和がその交渉に悪影響を与えないようにと心配していた。

論点の第二は至元十八年八月の<sup>14</sup>の文に基いている。敵に会わないうちに全軍を失って帰還したのだが、范文虎ら諸將の報告によれば、大宰府を目ざして進攻しようとしていたところ、暴風で船舶が大きな損壊を被って、將校たちが統制を乱して逃げ去ったため兵士を船に載せて合浦に至って郷里に還らせたという。將校とは、<sup>14</sup>には厲德彪・王国佐の名が見えるが、『元史』日本伝には万戸厲德彪・招討王国佐・水手総管陸文政の三名が現場において責任のあった者とされている。つまり本格的に戦端をひらく前に引きあげたとの言い方である。<sup>16</sup>『元史』世祖紀には遠征軍主力の帰還についてつぎのように伝えている。

（至元十八年八月壬辰）、詔征日本軍回、所在官為給糧。忻都・洪茶丘・范文虎・李庭・金方慶諸軍、船為風濤所激、大失利、余軍回至高麗境、十存一二。

（至元十八年八月壬辰（二十九日））、詔し、征日本軍が回ったので、所在の官が糧食を供給してやるようにした。忻都・洪茶丘・范文虎・李庭・金方慶の諸軍は、その船が風濤に激しくうたれて、大敗を喫し、残余の軍で高麗の国境まで回り着いたものは全体の一、二割であった。

論点の第三は⑤の文に基き、遠征軍の本隊から置き去りにされた末にようやく脱出帰還を果した江南出身の敗残兵于闐なる者の生々しい証言であり、従来よく知られた史料である。ここに取り上げている『経世大典』の記録が節略された短文の引用が多いなかで、⑤は『元史』日本伝と重なって比較的長文の引用となっている。第二次遠征の失敗の真相を伝えるものとして尊重されているからであろう。范文虎らの報告自体には大筋において誤りはなかったとはいえ、遅れてもたらされた于闐の報告は衝撃的なものであった。十余万人が島に残され、食糧もなく統率者もない状態で三日が経過し、ようやく衆議により張百戸なるものを首領として帰還を図ろうとしていたところ、日本人の襲撃に遇い、戦死を免れたもの二、三万人が捕虜として博多に連行された。そこでは蒙古人・高麗人・漢人は殺害されたが、旧南宋の新附軍は日本人によって「唐人」と見なされて奴とされた。于闐はそこから逃れて帰ってきたのだった。本隊が撤退して孤立に陥った状況を伝える「無食無主者三日」の表現は『経世大典』だけに見える。文中「平壺島」は平戸、「八角島」は博多である。⑥にも見える「五龍山」は鷹島であるという。<sup>(47)</sup> 于闐にやや遅れて莫青と呉万五の二人が帰着した。本隊に取り残されて辛酸をなめて帰還した三人であった。そのあまりに悲惨な印象が「十万之衆、得還者此三人耳（也）」の表現を生んだのである。<sup>(48)</sup> 范文虎ら省臣（征日本行省臣）が先に撤退して多くの兵を置き去りにしたあとの状況について于闐の証言があつて、將軍たちの罪がはじめて暴露（暴著）されたとは『経世大典』の評言である。

また『元史』卷一六五、張禧伝も暴風に遇った遠征軍の混乱を伝えている。

（至元）十七年、加鎮国上將軍・都元帥。時朝廷議征日本、禧請行、即日拜行中書省平章政事、与右丞范文虎・左丞李庭同率舟師、泛海東征。至日本、禧即捨舟、築壘平湖島、約束戰艦、各相去五十步止泊、以避風濤觸擊。八月、颶風大作、文虎・庭戰艦悉壞、禧所部独完。文虎等議還、禧曰、「士卒溺死者半、其脱死者、皆壯士也、曷若乘其無回顧心、因糧於敵以進戰。」文虎等不從、曰、「還朝問罪、我輩当之、公不与之。」禧乃分船与之。時平湖島屯兵



四千、乏舟、禧曰、「我安忍棄之。」遂悉棄舟中所有馬七十匹、以濟其還。至京師、文虎等皆獲罪、禧独免。

張禧は（至元）十七年に、鎮国上將軍・都元帥を加えられた。その当時、朝廷では日本を征伐することが議せられ、禧は自分も行こうと請うて、即日に行中書省平章政事を拝命し、右丞范文虎・左丞李庭とともに舟師を率いて、海に泛<sup>うか</sup>び東征した。日本に至ると、禧はさっそく上陸し、砦を平戸に築き、戦艦を統制して、それぞれ五十歩の間隔をあけて停泊し、風濤の衝撃を避けようとした。八月、暴風が大いに作り、文虎と庭の戦艦はみな損壊したが、禧が統率するものだけは無事であった。文虎らが帰還を議したとき、禧がこう言った。「士卒で溺死した者が半ばとはいえ、死を脱した者はすべて壮士なのだから、ここは兵に後ろを顧みる気がないのに乗じ、敵中に糧を求めて前進して戦うのが一番だ」。文虎らはそれに従わずこう言った。「帰朝して罪に問われる時には自分が矢面に立つから、公は関与せずともよい」。禧はそこで自分の船を分け与えた。その時、平戸には兵四千を駐屯させていたが舟が不足していた。禧はどうして彼らを遺棄できようものかと言って、かくて舟中の馬七十匹をすべて棄てて兵の帰還を成し遂げた。京師に至って、文虎らはみな罪を得たが、禧だけは罪を免ぜられた。

范文虎が戦闘を回避して日本を離れる時点ですでに失敗の責任を自覚していたことがわかる。李庭も同じく責任を免れないところであろう。<sup>(49)</sup> 行中書省平章政事であった張禧は諸将とは異なり罪を免れたという。しかし范文虎らが実際どのような罪にあてられたかを伝える史料を見出せない。民国期の屠寄『蒙兀児史記』卷一二、范文虎伝には『元史』張禧伝を引きながらつぎのようにいう。

初議班師、張禧曰、「士卒溺死過半、其脱死者、皆壯士也、易若乘其無返顧心、因糧於敵以進戰。」文虎不從、曰、「還朝問辜、我自当之。」及歸、文虎以遇風之狀奏、汗竟不之辜。

後世の解釈ではあるが、范文虎は大風に遇った状況を奏上し、敗戦の責任と処罰については「汗、竟にこれを辜せず」

とあるように、降格はされたであろうが、刑罰が適用されるまでのことはなかったと推測される。范文虎はのちに江南の諸叛乱討伐に従事するなどして武官としての生涯を終えている。

論点の第四は[16]の文に基くとみられる。すなわち至元二十年（一二八三）の淮西宣慰使昂吉児アンギルの意見であり、字数でいえば[16]の文の半ばを占める。しかもこの部分は例外的に『元史』日本伝には対応せず、つぎに掲げる同書卷一三二、昂吉児伝と相互に補うところがある<sup>(30)</sup>。

日本不庭、帝命阿塔海等領卒十万征之、昂吉児上疏、其略曰、「臣聞兵以氣為主、而上下同欲者勝。比者連事外夷、三軍屢衄、不「可」以言氣、海内騷然、一遇調発、上下愁怨、非所謂同欲也、請罷兵息民。」不從。〔既而師果無功。〕

日本が元朝にまつろわないので、帝は阿塔海アタハイらに命じて兵卒十万を率いて征討させようとした。昂吉児が上疏した。その概略は以下のようだった。「臣が聞くところでは、兵は氣を以て主と為し、上下の欲を同じくする者は勝つといます。このごろしきりに外夷征討を行って大軍は屢々敗北し、とても氣どころではなく、国中が騷然たる状況です。ここで一たび征討に伴う徴発に遇おうものなら上下のものが嘆き怨み、いわゆる欲を同じくするものではありません。どうか派兵を中止し民を休息させていただきたい」。従わず。「かくて遠征軍は成功せずじまいだった」。

第三次日本遠征計画については、『元史』卷一二、世祖紀にいう。

（至元二十年五月甲子）、立征東行中書省、以高麗国王与阿塔海共事。給高麗国征日本軍衣甲。

高麗との連携を前提として計画されたから、この記事は当然『元史』高麗伝にも載せられている。征東行省は征日本行省（日本行省）とも称された。[16]にみるように、日本行省の人事が発表され、十万人規模の遠征軍が組織されようとしたのに危機感を覚えて、昂吉児は緊急提言した。彼の日本遠征中止提言は民の過重な負担（民勞）を理由としていた。

しかし彼の提言はその時には世祖に受け入れられなかった。また『孫子』などを引用して説くところは戦争における上下不一致や闘志（士気）の問題である。『経世大典』の編者はここに着目して、第二次遠征の不幸な結末と関連づけて⑤の末尾に挿入し、前段部分を承けての締めくくりとしたのであった。

なお『元史』昂吉児伝に上疏の記事に続けて「既而師果無功」とあるのには問題がある。これでは第二次遠征以前の提言の如くにみえるが、そうではなく、六字は削除すべきところである。『蒙兀児史記』卷九六、昂吉児伝には上疏のあとに、「行省尋罷、師亦不出（行省尋で罷められ、師も亦た出でず）」と文章を付け加えたうえで、「旧伝に『既にして師果して功無し』と云うは、語意誤る」と注している。

『経世大典』日本の記事には昂吉児の名が四箇所も見えている。④の前段には「（至元）二十年、阿塔海復以十万人往、而昂吉児上言、民勞、乞寢兵」とあり、後段にはつぎのようにある。

上亦謂、「日本未嘗相侵、而交趾犯辺、宜置日本、専事交趾。」遂罷征、日本人竟不至。

世祖はやはりこう言った。「日本は未だ嘗て侵攻してきたことはないが、交趾は我が辺境を犯しているのだから、ここは日本はさし置き、専ら交趾を相手にするのがよい。」かくして日本遠征を取り止めた。日本人がやって来ることはなかった。

つまり④の前段と後段を関連づけて読まれかねない文章になっている。しかし後段は⑧に対応していて、至元二十三年（二二八六）であるのは明らかである。従って事態の推移の次第からすれば、世祖が日本遠征よりも交趾遠征を優先しようとしたのは昂吉児の提言に従ったわけではなかった。『元史』卷一四、世祖紀にいう。

（至元二十三年正月）甲戌、帝以日本孤遠島夷、重困民力、罷征日本、召阿八赤赴闕、仍散所顧民船。

（至元二十三年正月）甲戌（七日）、帝は、日本は遠く離れた島夷であり、（これを相手にしては）民力をひどく苦

しめるので、日本を征討するのを罷め、阿八赤<sup>アハチ</sup>を召喚して闕に赴かせ、なお顧った民船を解散させた。

世祖が日本遠征中止を宣言したのは至元二十三年初頭であり、これは前年に劉宣の上奏があったのを承けての最終決定であった。日本に対して軍事力を行使するのをやめたこと、その帰結として日本国からの使者派遣と通好が世祖期においてついに実現しなかったことを強く意識するが故に、<sup>①</sup>の末尾に無くもがなの「日本人竟不至」の句が挿入されたのである。この句は<sup>②</sup>の末尾にも見え、『元史』日本伝全体の末尾の句でもあるから<sup>③</sup>が定位置といふべきである。

昂吉児は西夏の將軍の家に生まれた。父は太祖チンギスに仕え、その後を継いだ彼も世祖の信任厚く、権臣阿合馬一党の不正をも直言できた人物であった。世祖は時に直言してやまない昂吉児に憤りを覚えても、最後には彼の純粹さを認めていた。<sup>④</sup>第三次遠征計画の中止を求める意見は他にもあったにもかかわらず、彼の名が『経世大典』に残されたのはやはり世臣としての評価が高かったからであろう。

## むすび

『経世大典』日本の記述はつぎのような<sup>⑤</sup>の文で締めくくられる。

あ、世祖が文武により天下を経営し四海を略定したこと、人物を見きわめる明察ぶり、謙虚でありながらその徳がおのずと輝く度量、成宗がよく満を持したこと、昂吉児の正しい言葉、日本遠征の諸將の罪責、そして日本はみずから天子が天下に君臨するのを拒絶したこと、これらはみな後世に伝えおくべきことだ。

全体として偉大な世祖皇帝の事績の顕彰に主眼がおかれた記述であった。日本は惜しいことに、そうした皇帝の聖徳光被の機会をみずから捨て去ったとの結論になっている。

本稿ではまずは『経世大典』の論法に添いつつ整理してきた。『経世大典』の記述は必ずしも緻密に書かれていない

箇所もあり、正確な意味で反省や論評とは言えない面もあった。大元帝国としての一方的な先入観や価値観に貫かれていることもけだし当然であろう。対象とする日本の事情に立ち入って顧慮するところもあまりない。主として交通の困難に起因する情報伝達の不備や遅滞など、当時の困難な制約のもとで両国間の認識のすれ違い（ミスコミュニケーション miscommunication）、あるいはミスコミュニケーション以前ともいえるべき諸事象を見出す。元朝・高麗・日本の間に生じた対立や衝突や戦役について考察しようとする場合、従来、時として正邪の決めつけを免れないこともあったかに見える。筆者の関心としては、努めてそうした予断を解きほぐし脱して、東アジアの歴史的環境のなかで諸国の人々がいかに考え行動したかを明らかにしたいと考えている。

## 注

- (1) 池内宏『元寇の新研究』一九三二、東洋文庫。
- (2) 「モンゴル国国書の周辺」(『史窓』第六四号、二〇〇七)、「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」(『東方学報』第九〇冊、二〇一五)、参照。
- (3) 『元史』卷三二、文宗紀天曆二年九月戊辰条にいう。  
 勅翰林国史院官同奎章閣学士采輯本朝典故、準唐・宋会要、著為経世大典。
- (4) 治典・賦典・礼典・政典・憲典・工典は六部の吏・戸・礼・兵・刑・工に対応するから、この日本についての叙述は当然ながら、兵事として扱われたものである。

(5) 雲南地方辺境にあり緬国に接する小部族国家。

(6) 『元史』日本伝には曹介升とあり、『元文類』には曹介叔とある。ほかにこの人名に関する史料を見出せないで、さしあたり『元史』日本伝による。

(7) 但し第八次遣使の使者は如智・王君智、第九次遣使は王積翁・如智と一般に理解されている。第八次遣使は『善隣国宝記』によれば、出航したが途中で引き返したという。『経世大典』では使者の名録として、第八次遣使は顧慮せずに第九次遣使を取り上げている可能性もある。

(8) 「鎌倉年代記裏書」(『増補統史料大成』所収)にいう。

大元將軍夏貴・范文虎、使周福・欒忠相具渡宋僧本曉房靈泉・通事陳光等着岸、牒狀之旨如前々、於博多斬首。

(9) 『勘仲記』弘安二年七月廿五日条にいう。

参殿下、次謁信輔、宋朝牒狀自関東去夕到來、今日於仙洞有評定、殿下已下皆参、左大弁宰相束帶、読申牒狀云々。

如伝聞者、宋朝為蒙古已被打取、日本是危、自宋朝被告知之趣歟、今日人々議不一揆云々。

また同書弘安二年七月廿九日条にいう。

今日異国牒狀内々有御評定、書狀之体違先例、無礼也。亡宋旧臣直奉日本帝王之条、誠過分歟。但落居分、関東定計申歟。

(10) 至元二十九年六月には四艘の日本の互市船のうち難破をのがれた一艘が慶元路に到達した。商舶の帰国に際し、江浙行省参知政事の燕公楠からの牒狀が鎌倉にもたらされた(拙稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」)。

また「鎌倉年代記裏書」正応五年(一二九二)七月にいう。

附商船帰朝、大元燕公南<sup>マ</sup>献牒状。

(11) 拙稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」参照。

(12) 用例としては、「待以不臣之礼」、「加不臣之礼」、「行不臣之礼」などという。また『善隣国宝記』巻上という。

『宋元通鑑』曰、元使黑的奉書如日本、示以不臣之礼、道由高麗、高麗禎言、「其道險、不可辱天使。」命其起居舍人潘阜持書往、留六月、不得其要領而還。黑的遂不復往。

(13) 「鎌倉年代記裏書」にいう。

今年建治元四月十五日、大元使着長門国室津浦、八月、件牒使五人被召下関東、九月七日、於(滝)「龍」口刎首。一、中(須)「順」大夫・礼部侍郎杜世忠、年卅四、大元人、……二、奉訓大夫・兵部侍郎何文着、年卅八、唐人、……三、承仕郎回々都魯丁、年卅二、回々用人、四、書状官薰畏国人杲、年卅二、五、高麗訳語郎将徐、年卅三、……

(14) 『元史』卷二〇八、日本伝にいう。

(至元) 十七年二月、日本殺国使杜世忠等。征東元帥忻都・洪茶丘請自率兵往討、廷議姑少緩之。

(15) 拙稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」参照。

(16) 張東翼「一二六九年「大蒙古国」中書省の牒と日本側の対応」(『史学雑誌』第一一四編第八号、二〇〇五、『モンゴル帝国期の北東アジア』二〇一六、に再録) 参照。また拙稿「モンゴル国国書の周辺」参照。

(17) 『元史』卷六、世祖紀至元四年六月乙酉条にいう。

黑的・殷弘以高麗使者宋君斐・金贊不能導達至日本来奏、降詔責高麗王王禎、仍令其遣官至彼宣布、以必得要領爲期。

また『元高麗紀事』にいう。

(至元四年) 六月十日、奉旨、復遣黑的与君(斐)〔斐〕等還、諭以日本国通好事。詔曰、「向聞卿之東鄰、有日本国、故命使而往招懷、特委卿遣介鄉導、不意卿以辞為解、遂令徒還。……惟卿前後食言多矣、不待縷數、而自知焉。今日本之事、一以委卿。凡我朝所行、卿之所信服者、当俾官詣彼宣布、以必得要領為期。……」

(18) 『元史』卷二〇八、高麗伝にいう。

(至元) 四年正月、禎遣君斐等奉表從黑的等人朝。六月、帝以禎飾辞、令去使徒還、復遣黑的与君斐等以詔諭禎、委以日本事、以必得其要領為期。九月、禎遣其起居舍人潘阜・書狀官李挺充国信使、持書詣日本。

(19) 『高麗史』卷二六、元宗世家にいう。

(元宗九年) 秋七月丁卯(十八日)、起居舍人潘阜還自日本。遣閤門使孫世貞・郎將吳惟碩等如蒙古賀節日。又遣潘阜偕行、上書曰、「向詔臣以宣諭日本、臣即差陪臣潘阜、奉皇帝璽書、并齋臣書及国驢、以前年九月二十三日、発船而往、至今年七月十八日回来、云、自到彼境、便不納王都、留置西偏大宰府者、凡五月、館待甚薄、授以詔旨而無報章。又贈国驢、多方告諭、竟不聽、逼而送之。以故不得要領而還、未副聖慮、惶懼実深。輒茲差充陪臣潘阜等以奏。」

なお②と『元史』日本伝では、大宰府に留め置かれた期間を六箇月としている。報告に向つた潘阜がモンゴルの国都に到着したのは同年八月であらう。これを受けて九月、黑的・殷弘に命じ国書を齎し日本に行かせることとなつた(第三次遣使)。

(20) 『元史』卷六、世祖紀至元五年九月(己)〔乙丑〕(十七日) 条にいう。

命兵部侍郎黑的・礼部侍郎殷弘齋国書復使日本、仍詔高麗国遣人導送、期於必達、毋致如前稽遲。

『元高麗紀事』所載の高麗国王宛の詔文の末に「卿、当に重臣まことをして導送せしむべく、前の如く稽阻きそするを致す母れ」と



ある。

(21) 「称名寺文書」(『鎌倉遺文』巻一四、一〇三八〇)。

(22) 拙稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」参照。

(23) 拙稿「モンゴル国国書の周辺」参照。

(24) 趙良弼については、太田彌一郎「石刻史料『贊皇復県記』にみえる南宋密使瓊林について——元使趙良弼との邂逅」

『東北大学東洋史論集』六、一九九五)、山本光朗「趙良弼について(一)」(『北海史論』二〇、二〇〇〇)、同「元使趙良弼について」(『史流』四〇、二〇〇一)、同「趙良弼撰『默庵記』について」(『史流』四一、二〇〇四)、参照。

(25) 『高麗史』巻二七、元宗世家、元宗十三年正月丁丑条。

(26) 『元史』巻七、世祖紀にいう。

(至元九年)二月庚寅朔、奉使日本趙良弼、遣書狀官張鐸同日本二十六人、至京師求見。

使者の数について、十二人とするのは『高麗史』、『元高麗紀事』、『元史』高麗伝、趙良弼伝、『元朝名臣事略』であり、二十六人とするのは『元史』本紀、日本伝である。また『元史』巻一五九、趙良弼伝にいう。

良弼曰、「不見汝国主、寧持我首去、書不可得也。」日本知不可屈、遣使介十二人入覲、仍遣人送良弼至対馬島。日本の使者について池内宏氏はつぎのように論じている(『元寇の新研究』一九三二)。

趙良弼の伝は、……良弼の態度の強硬であつた為に、我が太宰府の官憲が十二人の使者を元に朝せしめたやうに伝へている。返牒の与へられなかつた以上、これが我が国の正しい使者でなかつたことは言ふまでもないが、……。

(27) 『元史』巻二〇八、日本伝にいう。

帝疑其国主使之来云守護所者詐也。詔翰林承旨和礼霍孫以問姚枢・許衡等、皆対曰、「誠如聖算。彼懼我加兵、故発

此輩伺吾強弱耳。宜示之寬仁、且不宜聽其入見。」從之。

また高銀美「大宰府守護所と外交―大宰府守護所牒を手がかりに―」（『古文書研究』七三、二〇一二）参照。

（28）『元高麗紀事』にいう。

（至元九年）二月十三日、（植）「禰」致書於日本国王、使通好天朝。

この記事に対応して『元史』卷二〇八、高麗伝に「二月、禰致書日本、使通好（于）「天」朝。」とあり、同日本伝に「是月（二月）、高麗王禰致書日本。」とある。

（29）『元史』日本伝に、注（28）の記事に続けていう。

（至元九年）五月、又以書往、令必通好大朝、皆不報。

また「鎌倉年代記裏書」にいう。

翌年（文永九年）五月、張鐸帰来、高麗牒状又持来。

『元史』日本伝に「皆報せず」とあるのをみれば、文脈の上からは二月と五月の二つの書を指すであろう。しかし後者の「令必通好大朝」は、前者の「使通好天朝」（『元高麗紀事』、また『元史』高麗伝）と極めて似た表現であるから、両者は同じ高麗国書の発給と受領を指す可能性もある。疑義を存しながら、当面二つの書と解しておく。

なお高銀美氏は、五月に張鐸がもたらした高麗牒状について、高麗国慶尚晋安道按察使の牒（文永七年（一二二七）〇）二月付で作成されながら発給中止となった大宰府守護所の牒に関連する）と似通ったものと推定される。注（27）高銀美「大宰府守護所と外交―大宰府守護所牒を手がかりに―」参照。

（30）『高麗史』卷二七、元宗世家にいう。

（元宗十三年十二月庚戌）、元復遣趙良弼如日本招諭。

趙良弼の日本への再訪を前稿では第六次遣使と数えたが、一連の活動として一つに数えることとした。

(31) 『高麗史』 卷二七、元宗世家にいう。

(元宗十四年三月癸酉)、趙良弼如日本、至大宰府、不得入国都而還。乙亥、王引見旁問、贖白銀三斤・苧布十匹。達魯花赤李益又贈以物、良弼曰、「此汝侵略高麗而得也。」不受而去。

(32) 『元史』 卷八、世祖紀にいう。

(至元十年六月戊申)、使日本趙良弼、至大宰府而還、具以日本君臣爵号・州郡名数・風俗土宜来上。

(33) 前掲太田彌一郎「石刻史料「贊皇復鼎記」にみえる南宋密使瓊林について——元使趙良弼との邂逅」参照。

(34) 『元史』 卷一五九、趙良弼伝にいう。

(至元) 十年五月、良弼至自日本、入見、帝詢知其故、曰、「卿可謂不辱君命矣。」後帝將討日本、三問、良弼言、「臣居日本歲余、觀其民俗、狼勇嗜殺、不知有父子之親、上下之礼。其地多山水、無耕桑之利、得其人不可役、得其地不加富。況舟師渡海、海風無期、禍害莫測。是謂有用之民力、填無窮之巨壑也、臣謂勿擊便。」帝從之。

(35) 注 (34) に同じ。

(36) 趙良弼の肩書は少中大夫・秘書監(いずれも従三品)である。因みに第一次・第三次遣使の黒的(兵部侍郎)と殷弘(礼部侍郎)は正四品であった。

(37) 『左氏伝』 隱公六年に「親仁善鄰、国之宝也(仁に親しみ鄰を善くするは国の宝なり)」という。

(38) ㊦の文について筆者は、原文の「豈以高麗林衍叛、道梗故耶」を挿入句のように理解しようとしている。また旅拒(旅拒)については『後漢書』 列伝卷一四、馬援伝にいう。

若大姓侵小民、黠羌欲旅拒、此乃太守事耳。

これにつき李賢の注に「旅拒、不従之貌」とあり、王先謙の集解に「旅拒、聚衆相距耳」とある。中国周辺の夷狄が衆を集めて中国王朝に武力抵抗するのが原義である。

(39) 『元史』卷九、世祖紀にいう。

(至元十四年四月) 丙戌、禁江南行用銅錢。

高橋弘臣『元朝貨幣政策成立過程の研究』(二〇〇〇)、参照。高橋氏は旧南宋領における銅錢・金・銀の使用禁止の経過を論じ、江南併合の当初には銅錢使用は是認されたが、至元十四年四月に禁止され、十七年正月に民間の銅材・銅錢・銅器を回収し、同年六月には宋の銅錢を廢したという。また『心史』に拠って、江南でも平準庫が設置され、その目的は紙幣の流通手段としての機能を強化するとともに、金・銀の平準庫への吸い上げにあったと言われる。

(40) 『易』師の卦にいう。

六三、師或輿尸。凶。象曰、師或輿尸、大无功也。

(41) 上下の人々の心が合致していれば勝つの意。『孫子』謀攻にいう。

故知勝有五、知可以与戦不可以与戦者勝、識衆寡之用者勝、上下同欲者勝、以虞待不虞者勝、将能而君不御者勝、此五者知勝之道也。

(42) 『春秋經筵』(宋・趙鵬飛撰) 卷六、僖公十五年十一月にいう。

兵以氣為主、氣以直為主、辞曲則群心沮而銳氣挫矣、尚何戦哉。

この言葉は『統資治通鑑長編』『金史』『元史』『平宋録』『紫山大全集』『秋澗先生大全文集』などにも見えるから、激動する近世の流行語であつたのかもしれない。

(43) 挫衄は軍隊が敗れる場合に使われるが、もと挫は挫折でくじくの意、衄は鼻血が原義である。

(44) 『元史』卷一二、世祖紀至元十八年二月丙戌条にいう。

征日本国軍啓行。

(45) 『元史』日本伝の「始因彼国使來、故朝廷亦遣使往、彼遂留我使不還、故使卿輩為此行」の一節は、筆者が前稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」で取り上げた如智・王君治による第八次遣使の際の「宣諭日本国詔」『善隣国宝記』所収の文言と重なるところがあった。補足して附言しておきたい。「宣諭日本国詔」にはいう。

向者、彼先遣使人覲、朕亦命使相報、已有定言、想置於汝心而不(志)忘也。頃因信使執而不返、我是以有舟師進問之役。

(46) 同様の表現は、つぎの『元史』卷一五四、洪俊奇伝にも見える。

(至元)十八年、与右丞欣都将舟師四万、由高麗金州合浦以進、時右丞范文虎等将兵十万、由慶元・定海等処渡海、期至日本一岐・平戸等島合兵登岸、兵未交、秋八月、風壞舟而還。

(47) 服部英雄『蒙古襲来』二〇一四、参照。

(48) 『元史』卷一二、世祖紀至元十八年十一月丙戌条にいう。

勅征日本回軍後至者、分戍沿海。

范文虎らの本隊とともに帰還したもののほか、後れて至った者には沿海警備の任務が与えられた。上述の于闐ら三人のほかにも敗残兵の帰還は続いたのであろう。

(49) 『元史』卷一六二、李庭伝にいう。

(至元)十八年、軍次竹島、遇風、船尽壞、庭抱壞船板、漂流抵岸、下収余衆、由高麗還京師、士卒存者十二。

(50) 『歴代名臣奏議』卷二三五に左丞昂吉兒の上疏として見えるところは、『元史』本伝と同文である。

(51)『元史』卷一三三、昂吉兒伝にいう。

昂吉兒屢為直言、雖帝怒甚、其辭不少屈。台臣慮昂吉兒難制、以牙以迷失不畏強禦、奏為本道按察使以察之、牙以迷失時摺撫昂吉兒細故以聞、及廷(辨)〔辯〕、帝察其無他、輒遷其官、後竟以微過罪之。元貞元年卒。

(補注) ㊦の「又詔勿困苦其商人」の句について、筆者は㊦の至元十四年の措置と一体で同年のことと思いついていた。これが誤りであることは石井正敏氏の論考(附記参照)を見れば明らかである。氏は「本紀・至元十五年十一月丁未条に「詔諭沿海官司、通日本国人市舶」とみえる」と明確に指摘しておられた。まさしく従うべきである。沿海官司宛の詔書中に「勿困苦其商人」の句が存在したにちがいない。

〔附記〕

投稿後に、石井正敏氏の「至元三年・同十二年の日本国王宛クビライ国書について——『経世大典』日本条の検討——」(『中央大学文学部紀要』史学、五九、二〇一四、所収)の論文があるのを知った。『経世大典』に着目した契機、分析方法、考察に本稿と共通するところが多い。しかし本稿にはいくらか氏の論及されなかったり、異見に近いところもあると思うので、筆者は、一つの補注を附するのを除き、成稿のまま掲載させていただくこととした。

読者には、石井正敏氏の論考を併せ参照されるよう希望する。

【史料】『經世大典』 政典・征伐・日本序錄——『元史』 日本傳對照

〔A〕日本海國、自至元・大德間、黑迪・殷弘・趙良弼・杜世忠・何文著・王積翁・釋如智・寧一山、與高麗之潘阜・金有成輩、數使其國。惟積翁中道爲舟人所殺、餘皆奉國書以達、而竟不報聘。

〔1〕至元〔二〕〔三〕年、命兵部侍郎黑迪・禮部侍郎殷弘、持國書往使日本、書稱大蒙古皇帝奉書日本國王云々、末云不宜白。

〔至元〕三年八月、命兵部侍郎黑的、給虎符、充國信使、禮部侍郎殷弘給金符、充國信副使、持國書使日本。書曰、「大蒙古國皇帝奉書日本國王。朕惟自古小國之君、境土相接、尙務講信修睦。況我祖宗受天明命、奄有區夏、遐方異域、畏威懷德者、不可悉數。朕卽位之初、以高麗無辜之民、久瘁鋒鏑、卽令罷兵、還其疆域、反其旄倪。高麗君臣感戴來朝、義雖君臣、而歡若父子、計王之君臣亦已知之。高麗朕之東藩也、日本密邇高麗、開國以來、亦時通中國、至於朕躬、而無一乘之使以通和好、尙恐王國知之未審、故特遣使持書、布告朕志、冀自今以往、通問結好、以相親睦。且聖人以四海爲家、不相通好、豈一家之理哉。以至用兵、夫孰所好。王其圖之。」（日本傳）

〔2〕道高麗、高麗王〔植〕〔禎〕言、道險遠、不可辱天使。命其起居舍人潘阜持書往、留六月、不得要領而歸。

黑的等道由高麗、高麗國王王禎以帝命遣其樞密院副使宋君斐・借禮部侍郎金贊等導詔使黑的等往日本、不至而還。（至元）四年六月、帝謂王禎以辭爲解、令去使徒還、復遣黑的等至高麗諭禎、委以日本事、以必得其要領爲期。禎以爲

海道險阻，不可辱天使，九月，遣其起居舍人潘阜等持書往日本，留六月，亦不得其要領而歸。（日本傳）

③五年九月，再命黑迪·弘往，至對馬島，日本人拒不納交關，執其塔二郎·彌二郎二人而還。

（至元）五年九月，命黑的·弘復持書往，至對馬島，日本人拒而不納，執其塔二郎·彌二郎二人而還。（日本傳）

④六年，命高麗金有成送還執者，且俾中書省牒其國，亦不報。

六年六月，命高麗金有成送還執者，俾中書省牒其國，亦不報。有成留其太宰府守護所者久之。（日本傳）

⑤十二月，又命秘書監趙良弼往使，良弼乞定與其王相見之儀。廷議與其國上下分未定，與其國且無禮數。上從之。良弼至，留其太宰府守護所者久之。

（至元六年）十二月，又命秘書監趙良弼往使。書曰，「蓋聞王者無外，高麗與朕既為一家，王國實為鄰境，故嘗馳信使修好，為疆場之吏抑而弗通。所獲二人，敕有司慰撫，俾齋牒以還，遂復寂無所聞。繼欲通問，屬高麗權臣林衍構亂，坐是弗果。豈王亦因此輟不遣使，或已遣而中路梗塞，皆不可知。不然，日本素號知禮之國，王之君臣寧肯漫為弗思之事乎。近已滅林衍，復舊王位，安集其民，特命少中大夫·祕書監趙良弼充國信使，持書以往。如即發使與之偕來，親仁善鄰，國之美事。其或猶豫以至用兵，夫誰所樂為也，王其審圖之。」良弼將往，乞定與其王相見之儀。廷議與其



國上下之分未定、無禮數可言。帝從之。（日本傳）

〔6〕時又有曹介〔叔〕〔升〕者上言、「高麗迂路導引國使、有捷徑、順風半日可到、但使臣則不敢同往、大軍進征、則願爲鄉導。」上曰、「如此則當思之。」

（至元）八年六月、日本通事曹介升等上言、「高麗迂路導引國使、外有捷徑、倘得便風、半日可到。若使臣去、則不敢同往、若大軍進征、則願爲鄉導。」帝曰、「如此則當思之。」（日本傳）

〔7〕九年五月、命高麗王〔植〕〔禎〕、致書日本、諭使通好、始遣彌四郎者入朝、上宴勞之。既又逼使者徒歸、竟不報聘。

（至元八年）九月、高麗王禎遣其通事別將徐〔稱〕〔偁〕導送良弼使日本。日本始遣彌四郎者入朝、帝宴勞遣之。（至元）九年二月、樞密院臣言、「奉使日本趙良弼遣書狀官張鐸來言、去歲九月、與日本國人彌四郎等至太宰府西守護所。守者云、曩爲高麗所給、屢言上國來伐、豈期皇帝好生惡殺、先遣行人下示璽書、然王京去此尙遠、願先遣人從奉使回報。」良弼乃遣鐸同其使二十六人至京師求見。帝疑其國主使之來云守護所者詐也。詔翰林承旨和禮霍孫以問姚樞・許衡等、皆對曰、「誠如聖算。彼懼我加兵、故發此輩伺吾強弱耳。宣示之寬仁、且不宜聽其入見。」從之。是月、高麗王禎致書日本。五月、又以書往、令必通好大朝、皆不報。（日本傳）

〔B〕至元十〔一〕年、忻都・洪茶丘以二萬五千人征之、第虜掠而歸。

〔8〕十〔一〕年、命鳳州經略使忻都・高麗軍民總管洪茶丘、以千料舟・拔都〔魯〕輕疾舟・汲水小舟、各三百、共九百艘、載士卒二萬五千伐之。

（至元）十一年三月、命鳳州經略使忻都・高麗軍民總管洪茶丘、以千料舟・拔都魯輕疾舟・汲水小舟各三百、共九百艘、載士卒一萬五千、期以七月征日本。（日本傳）

〔9〕十一年十月、入其國敗之、而我軍不整、箭又盡、第虜掠四境而歸。

冬十月、入其國敗之。而官軍不整、又矢盡、惟虜掠四境而歸。（日本傳）

〔10〕十二年、遣禮部侍郎杜世忠・兵部侍郎何文著・計議官廳都魯丁往使、書前言大元皇帝致書於日本國王、後言不宣白、亦不來覲。

（至元）十二年二月、遣禮部侍郎杜世忠・兵部侍郎何文著・計議官撒都魯丁往使、復致書、亦不報。（日本傳）

〔11〕十四年、遣商人持金來易銅錢、許之。

（至元）十四年、日本遣商人持金來易銅錢、許之。（日本傳）

〔C〕十〔七〕〔八〕年、阿剌罕・范文虎輩、以十萬人征之、未見敵、喪全師。

〔12〕十七年十月、立日本行省、命阿剌罕爲右丞相、與〔左〕〔右〕丞〔相〕范文虎及忻都・茶丘等、率十萬人討之。

〔至元〕十八年正月、命日本行省右丞相阿剌罕・右丞范文虎及忻都・洪茶丘等率十萬人征日本。……八月、諸將未見敵、喪全師以還、乃言、……〔日本傳〕

〔13〕十八年二月、諸將陞辭、上若曰、「有一事、朕憂之、恐卿輩不和耳。范文虎新降者也、汝等必輕之。」

〔至元十八年〕二月、諸將陞辭。帝敕曰、「始因彼國使來、故朝廷亦遣使往、彼遂留我使不還、故使卿輩爲此行。朕聞漢人言、取人家國、欲得百姓土地、若盡殺百姓、徒得地何用。又有一事、朕實憂之、恐卿輩不和耳。假若彼國人至、與卿輩有所議、當同心協謀、如出一口答之。」〔日本傳〕

〔14〕八月、諸將未見敵、喪全師以〔返〕〔還〕、上言、「至日本、欲攻太宰府、暴風破舟、猶欲議戰、萬戶厲德彪・王國佐等、不聽節制逃去、本省載餘軍至合浦、散遣還鄉里。」

〔至元十八年〕八月、諸將未見敵、喪全師以還、乃言、「至日本、欲攻太宰府、暴風破舟、猶欲議戰、萬戶厲德彪・招討王國佐・水手總管陸文政等、不聽節制、輒逃去、本省載餘軍至合浦、散遣還鄉里。」〔日本傳〕

〔15〕未幾、敗卒于閭脫歸、言、「官軍六月入海、七月至平壺島、移五龍山、八月一日、風破舟、五日、文虎等諸將、各自擇堅好船坐去、棄士卒十餘萬于山下、無食無主者三日、衆議推張百戶者爲主帥、號之曰張總管、聽其約束。方伐木作舟欲還、七日、日本人來戰盡死、餘二三萬虜去、九日、至八角島、盡殺蒙古・高麗・漢人、謂新附軍爲唐人、不殺而奴之、閭輩是也。」蓋行省官議事不相下、故皆棄軍歸。久之、閭與莫青・吳萬五者逃還、十萬之衆、得〔返〕〔還〕者此三人也。

未幾、敗卒于閭脫歸、言、「官軍六月入海、七月至平壺島、移五龍山、八月一日、風破舟、五日、文虎等諸將、各自擇堅好船乘之、棄士卒十餘萬于山下、衆議推張百戶者爲主帥、號之曰張總管、聽其約束。方伐木作舟欲還、七日、日本人來戰盡死、餘二三萬爲其虜去、九日、至八角島、盡殺蒙古・高麗・漢人、謂新附軍爲唐人、不殺而奴之、閭輩是也。」蓋行省官議事不相下、故皆棄軍歸。久之、莫青與吳萬五者亦逃還、十萬之衆、得還者此三人耳。（日本傳）

〔D〕二十年、阿塔海復以十萬人往、而昂吉兒上言民勞、乞寢兵。上亦謂、「日本未嘗相侵、而交趾犯邊、宜置日本、專事交趾。」遂罷征、日本人竟不至。

〔16〕二十年、命阿塔海爲日本省丞相、徹里帖木兒右丞・劉二拔都左丞・陳某右丞・鄭某參政、往以十萬人往、淮西宣慰使昂吉兒上言民勞、乞寢兵。

（至元）二十年、命阿塔海爲日本省丞相、與徹里帖木兒右丞・劉二拔都兒左丞、募兵造船、欲復征日本。淮西宣慰使昂吉兒上言民勞、乞寢兵。（日本傳）

〔7〕二十一年、又以其俗尙佛、遣王積翁者與補陀僧如智往使、舟中有不願行者、共謀殺積翁、不果使而〔返〕〔還〕。

〔至元〕二十一年、又以其俗尙佛、遣王積翁與補陀僧如智往使。舟中有不願行者、共謀殺積翁、不果至。（日本傳）

〔18〕二十三年、上曰、「日本未嘗相侵、今交趾犯邊、宜置日本、專事交趾。」

〔至元〕二十三年、帝曰、「日本未嘗相侵、今交趾犯邊、宜置日本、專事交趾。」（日本傳）

〔E〕國書始書大蒙古皇帝奉書日本國王、繼稱大元皇帝致書日本國王、末並云不宜白、不臣之也。辭懇懇款款、自抑之意、溢於簡冊、雖孝文於尉陀〔佗〕、不是過。阜還、上以爲將命者不達、黑迪被劫、上以爲典封疆者、以慎守固禦爲常、此將吏之過。良弼之往、復謂不見報者、豈以高麗林衍叛、道梗故耶、終不以旅拒名之。忻都軍既還、其國遣商人持金來易錢、亦聽之。又詔勿困苦其商人、柔遠之道至矣。

〔F〕阿剌罕之行、上宣諭曰、「有一事、朕憂之、恐卿輩不和耳。」既而諸帥果以輿尸取敗、而上言將校不聽節制逃去、載〔運〕〔軍〕士至合浦、遣還鄉里。及敗卒于閩者脫歸、則言省臣先潰去、棄軍五龍山下、爲日本所殲、諸將之罪始暴著。昂吉兒之言曰、「語曰、『上下同欲者勝。』」又曰、「兵以氣爲主。」近歲民貧賦重、海水旱救死不暇、復驅之涉海遠征、莫不愁嘆〔歎〕、此非上下同欲也。軍嘗挫衄東海、倉皇喪氣、人無鬪志、非所謂以氣爲主也。」

〔G〕成宗卽祚、或又建言伐之。上曰、「今非其時、朕徐思之。」卒遣寧一山、附商舶往使而已。

〔19〕成宗大德二年、江浙省平章政事也速達耳乞用兵日本、上曰、「今非其時、朕徐思之。」

成宗大德二年、江浙省平章政事也速答兒乞用兵日本。帝曰、「今非其時、朕徐思之。」（日本傳）

〔20〕大德三年、遣僧寧一山者、加妙慈弘濟大師、附商舶往使日本、而日本人竟不至。

（大德）三年、遣僧寧一山者、加妙慈弘濟大師、附商舶往使日本、而日本人竟不至。（日本傳）

〔H〕嗚呼、世祖之文經武略、與知人之明、謙光之度、成宗之能持盈、昂吉兒之讜言、諸將之罪負、日本之自絕照臨、皆當使後世有聞焉。